

2010年(平成22)10月31日(日) / 八幡浜市釜倉集会所にて

井上武義さん(八幡浜史談会)

どうも失礼致します。年を取って、足が元来いけないものですから少し休ませて下さい。どうもすいません。今日は本当に大雨になって大変でした。ご苦労様でした。特に今日は、宇和方面から大勢来ると聞いていましたから、これは天気が持たないと思ってました。雨でさっぱりですね、ほんと。

笠置の峠について思い出すことからお話しさせていただきますが、この笠置の峠は昔からある峠でして、私が前の八幡浜の市長と同席することがあって話をした時に、「これは笠置の峠の道は 1000 年の古道ですよ」と言ったんです。そしたら平田市長が「井上君、これは 1000 年じゃないぞ、1500 年とかもっと。突き詰めていったら非常に難しい問題でもあるし、研究の余地もあるし、1000 年やそこらじゃないぞ」と言われまして、そのことがいつも笠置峠の話をするときに平田さんにやられたぞという話をするんですが失礼します。

まず私が笠置の峠を越えた歴史の人をなんぼか言うんですが、いつも先に思い出しますのは江藤新平です。明治の維新の大物で、西郷隆盛や板垣退助と同じ主義の人でして、征韓論とともに破れて野へ下った人らしいですが、その江藤新平が明治の7年(1874)にこの峠を越えております。なぜここを通ったかという、征韓論に破れて西郷隆盛が明治10年(1877)に西南の役をやったわけですが、そのちょっと前に佐賀の乱をやってその戦いに敗れて逃げてきた逃避してきたんです。その時の江藤新平の顔を私はいつも想像するんです。この山を越えるときにどういう顔をして越えたんだろうか。戦争に敗れてもう国賊になったんですから追われる立場だったんです。それでなぜここを通ったかといいますと、征韓論の盟友を頼って、詳しいことはわかりませんがどういう心境かこの笠置を越えた。それから三間の方へ出て、何ですか滑床にある村ですが、そこを通過して高知へ行ったと書いてありますが、詳しいことがないので想像するだけです。江藤新平がどういう面持ちでここを上がって行ったか、どういう足取りで行ったか、あるいは何を履いていたんだろうと思います。何ともたまらない気持ちになります。そして江藤新平はそれから数ヶ月の後に死刑になって、亡くなったんですが。そのせっぱ詰まった姿をいつも思って、まず人に話そうとするときはここを江藤新平がそういうことで越えたということになりやすいんです、私にとっては。

それから江藤新平の他には、昨日私八幡浜の史談会の勉強会がありましてその時に上甲振洋の研究会がありまして、その上甲振洋がまた明治6年(1873)にその研究会のときに記録を見てわかったんですが、上甲振洋さんもここを越えているということが書いてあるんです。あの人自身の書いた本に漢文ですけども書いてあります。講師の人に確認させてもらって「間違いはないか」と言うたら「間違いはない、ここに書いてある」ということでした。上甲振洋は大学で宇和島藩の藩校明倫館の校長をやっております。八幡浜にも 200 人ぐらいの弟子を持って、たいしたもんだったそうです。その人も笠置峠を越えた。

それからよく出るのはお伊ネさんです。お医者さんの。シーボルトさんの娘ですが、この人も長崎に生まれて、14 才の時初めて四国へ渡った。お伊ネさんが八幡浜のお宮から馬に乗ってここを越えたという情報が残っております。お伊ネさんは7回越えていると思

われ、関係が深いなと思います。

それから、西郷南洲がここを通ったんじゃないかと、今でも良く人にも聞くし私も迷うんですが、通った記録はまだ無いようですが、伊方の方へ来たり真穴の方の海岸部へ通っているようで、西郷南洲も来たんじゃないかと専門家の方でもちょっと議論があるようですが、結局来ていないのじゃないかというところに落ち着きますが。

そしてこの地元につわる色々なエピソードがあって、この和気さんのご先祖が造られた和気のお地蔵様。このお地蔵様については和気さんがおられるので詳しいことは聞けるんですが、あそこは昔から節季になると、年末ですが、盗賊が来て私は子供時分にも節季になるとシーズンのにそういうことを聞いて恐ろしいなと思っていました。そしてある晩鉄砲の音がしたことがあるんですが、これはすごいぞと思って。事はなかったんですけども。そういうことも経験しております。

とにかくあそこには大きな松が、ちょうど和気さんのお地蔵さんの、根本に大きな松があったんです。笠置の松とってあそこのお地蔵様の根方にひとつと、宇和側に 50 m 程行ったところにもう一本あって。そこを私朝 3 時頃に通ったことがあるんですが、もう木と木が会ってから空は全然見えないのですが、あの松はすごかったと思います。どこから見ても双岩の駅から見ても見えたそうなんですが、どこから見ても笠置に 2 本、私が見たら 2 本に見えたんですが、枝が重なり合うぐらいになって真っ黒い形で大きな笠置の松が見えるなという実感が今でも残っています。

あの笠置の山は地元の人にとっては非常に恐ろしい峠でもあります但し親しみも多い峠です。そのひとつは 4 月 8 日には山田のお薬師様がありまして、この近在の名所なんです、そこへお参りに行ってました。大きなひょうたん菓子が名物でしてそれがこの下にも吊ってありまして、若山の方にもその日は道端の方に吊って机を出してから売っているという風景が見られました。その時にお薬師様にお参りする人の多かったということはどう伝えたら伝わるんだろうかと今でも思います、とてもたいした人の数だったんです。もうここからずーっと列を作ってお薬師さんまで。また昔の人は真面目だったんだろうという感じもしますが。私はちょうど昭和 13 年に小学校を卒業して郵便局へ務めて郵便配達をしていました。その時分に鳥越に行かねばなりませんので、配達区域でして、それも行くときにずっと釜倉からだと思うんですが行列が峠までずーっと続いておるんです。私は鳥越に行くのにその脇をくぐっては行った記憶が今でもはっきりあるんです。皆、可愛らしいお嬢さんがメインでしたが、何か悩ましい気持ちでその間を通った記憶があるんですが。あの人の数というのは今はもう想像もできないような行列ですが。その時に峠筋に行かれる行列もあったんです。それもずっとお寺まで続いていて、あれは戦前の空気というのはのんびりしたものがあったと思うんですが、たいした人でした。今あんなに人は見ることはありません（拍手）

大事なことをお伝えすることを忘れていたことがありまして、笠置峠を宇和島の最後の殿様の伊達宗城さんの行列が越えております。これは『東宇和沿革史』に長州征伐のためにここを越えたと西園寺源透さんが書いております。その時には卯之町に泊まって八幡浜に出て、伊方へ向かって、伊方へ出たら長州征伐の問題が解決して、それからひっくり返して殿様はそのまま帰って、お付きの部隊が 1 ヶ月くらい滞在したと書いてあります。ちょっとそれを伝えておきます。以上です（拍手）

和気敬一さん（峠の地蔵を建立した和気吉蔵の子孫にあたる方）

はい、皆さんこんにちは。ただでも雨の中で足下の悪いところ、山を下って来た皆さんに大変貴重な時間を拝借致しまして、少しばかり笠置の峠に私たちの先祖が建てましたお地蔵さんにつきまして、簡単にお話しさせていただきます。最初にお断りしておきますが、私はここに生まれたものではございません。ここへ縁がありまして参りましたのは昭和 31 年（1956）でございまして、その当時まだ元気でありました養母にあたるものが笠置のお地蔵さんについて私に話してくれたことを若干お話しさせていただきたいと思うのでございます。私の話を聞きました母も実は隣の山を越えた谷（集落）から来たものでありまして、詳しい話は自分では知ってはなかったんだらうと思いました。

私たちは祖母にあたりますものが、昭和 6 年（1931）に亡くなっております。亡くなりましたその祖母が昭和 5 年、6 年に 4 月の 8 日に笠置まで上がりまして、その当時はお地蔵さんのすぐ横の、今日のぼっていただいたときにわかったと思うんですが休憩所のようなものがございまして、あそこに大きな松があったんです。その松の根本の方にあったんだらうと思うんですが、相撲が立ってたようであります。相撲がある時に、私たちの祖母が亡くなるまではそこへ何かを運んでは、ご接待をしたということを知り及んでおります。

お地蔵様につきましては私から 7 代くらい前になると思うんですが、和気吉蔵という人があれを建てたんですが、今から正確にいうと 212 年前になるかと思えます。和気吉蔵があのお地蔵そのものを建てたのは先程井上さんもちょっと触れられましたが、山を登り下りする間にいろんな悪戯をするようなものがあってたんでしょう。そういったものを当時は化け物が出たとか何とかそういうことで言っていたようではございますが、それらのものを鎮めるというふうな意味合いからお地蔵さんを建てることを思い立ったようであります。あのお地蔵さんを建てるにつきましては、高名な和尚さんを招きまして私たちの住んでおります家の前の代の折だらうかと思うんですが、畳が 15 枚敷けるような大きな部屋があったようです。そこへ真砂を積み上げまして、その真砂のひとつひとつに、小さな丸い浜にあります石ですね、石に経文字を書き込みまして、それをここに住んでおりますというふうな子供から老人までです。一人がひとつずつその石を持って上がったという話があるんですけども。子供は小さい幼児は持って上げられませんので、足の丈夫な人がそれをまた二つ三つ持って上がったと思うんですけども、お地蔵さんの下にはその経石が埋まっているようではございます。はぐってみたことはありませんので確かなことはわかりませんが、そういう話を聞き及んでおります。そういうふうにして、経石を土台の下に埋め込みまして、あのお地蔵が建てられたようではございます。

ご覧になった方もあろうかと思えますが、地蔵さんの顔が欠けております。あれは博打に手を出す人が、顔を掻き取って自分の運を付けるために持って帰ったという話を聞いた方も致しておりますが、定かなことはわかりません。なにしろ小さな農家でございまして、これといった貴重な書き残したのもございませんし、ただ話を聞きながらそういうことがあったんだなというようなことで私ども聞き及んでおりますし、またその程度のお話ししか出来ない状態です。

先程最初に触れました相撲が立っていたというのは、薄々察しますに 4 月 8 日にあそこで相撲があって、近在の若い力自慢の人たちが集まって相撲を取ったんだらうと。その時

に祖母が接待するために持って上がって接待した食べ物、いわゆるにぎりめしだったんだ
ろうと思いますがそれをつめるためのおひつと言いますか桶と言いますか、そういうもの
がまだ今も私の家に残っておりますが。お接待するための茶釜があったんですけども、
十年ほど前に空き巣が入りまして持って行かれてしまいました。峠までご飯とその茶釜を
オイコにからって上がっては、山から少し宇和側に下ったところに水の泉源がありまして、
そこから水を汲んで上がってはお茶を出して通る人にお茶を差し上げたという話は私の母
が祖母から聞いた話です。私もそれを聞いております。その程度のことでございまして誠
に簡単ではございますが、お地蔵さんが建ちましたいわれ、それから建ちました時代につ
いてお話しをさせていただきました。まことにお粗末でございました（拍手）。